

# Dr. ジーアの My カルテ

全農家畜衛生研究所  
クリニックセンター



## ワクモの生態とその対策について

「ワクモ」は鶏を吸血するダニの一種であり、多くの養鶏場がその被害に悩まされています。ワクモの浸潤により、増体率や産卵率の低下、死亡率の増加などの生産成績の低下のほか、さまざまな被害が報告されています(表1)。生産性向上及び飼養環境改善のためにも、防除対策の取り組みが必要です。

### ●ワクモの生態

ワクモは暗く、風の流れが弱い環境を好みます。こうした条件を満たしやすいのが、鶏舎内の金具の継ぎ目や鶏糞(写真)です。ワクモは集合フェロモンを出して「コロ

ニー」を形成します。吸血していない時には、鶏体ではなく、鶏舎環境中のコロニーなどに生息するため、オールアウトしても鶏舎内に居続けます。従って、飼養中だけではなく、オールアウト後の鶏舎環境への対策が必須となります。

洗浄機での鶏舎洗浄、工具や器具等の熱湯消毒が有効です。

また、対策として重要な薬剤散布ですが、その効果を引き出すにはコロニーに注意する必要があります。コロニー内には多量のワクモや卵が含まれており、薬剤をそのまま散布しても内部まで薬剤が浸透しないため、ワクモと卵が生き残るおそれがあります。空舎時の薬剤散布後に、生き残ったワクモは栄養を求めてコロニーから出てくるため、そのタイミングで洗浄消毒や薬剤散布をする事が対策として有効です。

表1. ワクモによるさまざまな被害

生産性への影響	産卵率低下、増体率低下、減耗羽数増加
鶏体への影響	ストレスによる免疫力低下、鶏痘や大腸菌症等の誘発、貧血、へい死増加
汚卵の増加	卵殻表面にワクモの排泄物や、吸血後ワクモが潰れて血液が付着する
卵質の低下	卵殻色の退色、卵重の低下、卵黄色やハウユニットの低下
従業員への影響	不快感、アレルギー、離職
コストの増加	薬剤費、労力の増加

「ワクモ防除対策に対する国内アンケート調査結果」(村野ら)を参考に作成

### ●ワクモ対策について

基本的なワクモ対策は表2の通りです。ワクモは65℃以上の温水中で瞬時に死滅するため、高温高圧

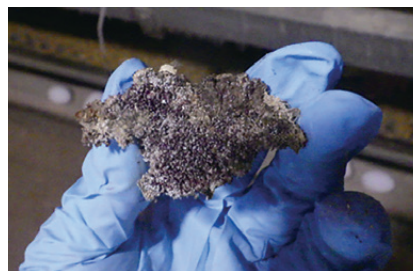


写真. 鶏糞内のワクモコロニー

近年では薬剤耐性ワクモの存在も明らかになってきており、薬剤の選定を誤ると、実際には薬剤コストだけがが増えていく悪循環に陥ります。ワクモに対する薬剤感受性試験を実施する事で、農場に存在するワクモにはどのような薬剤が有効かを把握する事が可能です。薬剤の使用については鶏体や作業者に対して有害なものも存在するため、管理獣医師の指示のもと十分注意してご使用ください。

ワクモ対策については農場の汚染度などを考慮して進める必要があります。珪藻土資材等も活用しながら、被害の低減を目指しましょう。

表2. ワクモ対策の基本事項

鶏舎専用長靴や衣服の着用	専用衣服や長靴を使用する事で、鶏舎間汚染の拡がりを抑える
ネズミやハエ対策による鶏舎間汚染防止	ネズミやハエを介したワクモの鶏舎間汚染の拡がりを抑える
踏込槽の設置	長靴を介したワクモの鶏舎内汚染の拡がりを抑える
鶏糞除去によるワクモの除去	ワクモが集まりやすい鶏糞の除去回数を増やし、鶏舎内の汚染を減らす(アウト後は速やかに)
洗浄によるワクモの物理的除去	鶏舎内の洗浄により、ワクモを物理的に除去する
薬剤の散布	事前の清掃が重要。アウト後や導入前など、薬剤感受性試験結果をもとに、有効な薬剤を使用する。
高温による殺滅処理	金具や工具の高温処理、鶏舎内の高温高圧洗浄機でのワクモ殺滅処理(ワクモは65℃以上の温水で死滅する)
珪藻土製品の散布	鶏舎内の環境衛生制御を目的とする